

Sibelius 2 (1)

先月号で紹介した楽譜ソフト Sibelius2 がいよいよ販売されました。昔から Finale と並んで評判は高かったのですが、価格の点や実際に体験することが出来にくいことなどから、Finale には一歩水をあけられていました。今回の Sibelius2 になって格段の性能アップと使いやすさが強調され教育界での利用に今後が期待されますので紹介する事にしました。まず、体験版で体験することができますが、デモンストレーションのCDには圧倒されます。

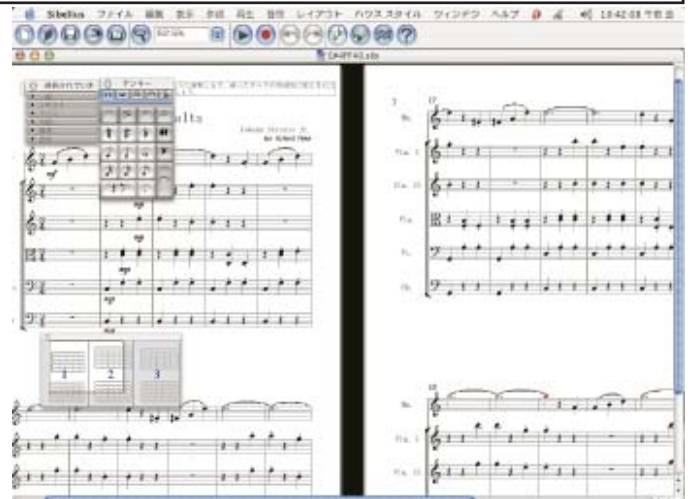
最近はこの手のソフトがすべてそうであるように、6万円以上のこのソフトは購入者(登録者)以外は回数制限で後何回使用できますという画面と戦いながら結局はうまい方法がないので買ってしまうのはめになります。ワンユーザ・ワンライセンスというのはちょっと厳しいようですが、コンピュータがクラッシュした等の事故の時はオンラインで再登録すればリカバリできるようです。

例によってこの手のソフトは取り説が何冊にもなっていたり電話帳の厚みだったりするのですが、それほどのボリュームではありません。何も読まずにどこまで出来るかというのがそのソフトの使いやすさの目安ですからまず何も読まずに立ち上げて見ました。

ファイルメニューを開けると「新規」や「開く」という通常のものに加えて「スコアを最後に追加」と言うのが目をひきます。このメニューの所には左から「ファイル」「編集」「表示」「作成」「再生」「音符」「レイアウト」「ハウスタイル」「ウインドウ」「ヘルプ」とメニューが並んでいます。この「音符」「ハウスタイル」という見慣れないメニュー以外は説明無しでも操作できます。「新規」から「用紙のサイズと向き」を選ぶと「楽器」のダイアログが開きます。



ここでいわゆるスタッフを揃えるわけですが、ランダムに楽器を選んででも自動的に正しい順番に並びます。



画面にはテンキーの形をしたものと、折り畳んであつて必要に応じて開くプロパティと呼ぶものと、ナビゲータとよぶ「楽譜全体を鳥瞰図のように見る」ダイヤログが見えます。同じようなものはFinaleにもありましたがこの種のウインドウを全部画面上に用意すると肝心の楽譜部分の面積が小さくなってしまいました。その点このSibelius2ではそれらのダイヤログが多層構造で表示されがめんどくさく占める面積が小さくてすみます。例えば次の5枚のテンキーは切り替えて使え、画面を切り替えるとテンキーもそれに対応



して変わります。つまり同じ「4」というテンキーのキーが左端の表示では四分音符というファンクションになるのに、右端の表示では「ナチュラル」の入力キーに変わります。199もあるショートカットを駆使すれば一度もマウスに手を触れることなく入力やその他の操作が出来てしまいます。

マウス入力をしていて直ぐに気が付いた事があります。「消しゴムツール」がないのです。そればかりかいわゆる「ツールボックス」がどこにもありません。では間違えた時はどうするのかというともう一度その上から書くと前の音

が消えます。DELETE キーでも最後の入力を取り消すことも出来ますし、いくつ前の履歴へも戻ることが出来ます。

音名の C,D,E,F,G,A,B とテンキーの組み合わせだけでもずらずらと入力できます。入力される音は音が鳴りますので耳でも確認できますが、多くのマックファンが抱えている問題である「OMS」システムが MacOSX で使えないという問題とは関係なく「OMS」無しで MIDI が鳴ります。ちなみにこの問題は OS10.2 以降では「有りもしないモデムポートやプリンタポートを探しに行く」ためにハングアップするという問題は無くなりましたが Finale の最新バージョンですら OSX では使えないという問題は Sibelius2 では起こりません。そこで、Sibelius2 では「フレキシタイム」というカウントに合わせて演奏すれば楽譜入力できる機能が活かされてきます。このフレキシタイム入力は「音符」メニューにあるのですが、ある程度自由なテンポでひいてもカウントがそれに追従してくれますので、ルバート演奏が多いピアノ演奏などを MIDI から採譜するという夢のような方法が可能になります。Finale にもタッピングをしながら入力するとか、あとからテンポ札を追加して採譜するという方法が有りましたが、やたらと手続きがうるさくて一発でできる人なんか居なかったと思うのですが、これは簡単です。

この Sibelius2 の凄いのは「MIDI シーケンサ」としての素晴らしい再生能力です。楽譜に埋め込まれた MIDI デー

タは忠実に再現されますし、～で始まるコントロールデータはあらゆる MIDI コントロールが可能です。

「再生」メニューの「辞書」という機能はイタリア語で書かれた「Allegro」などの言葉を MIDI 信号に変換しますので、特にコントロール信号を埋め込まなくてもテンポやその他の効果を演奏できます。



これらの演奏に関するボタンは常にメニューバーの下に表示されています。

また、ミキサー画面を通して MIDI データを演奏するときの細かいコントロールもできます。

使ってみてすぐ気が付いたのですが 1 段の楽譜に 2 声部が入るような場合の音符の棒の向きは Finale ではレイヤーを切り替えることで行いましたがレイアウトと呼ばれるものがこれに代わります。ただ、レイアウト間の移動や変更がワンタッチで行えますし、Finale では結構レイヤーに気を使ったのがあまり気にしなくても切り替えができたので最初はレイヤーの機能が無いのかと思ったほどです。

この Sibelius2 ではいままでも Finale で蓄えてきたデータがすべてそのまま使えますし、MIDI データが美しい楽譜になるのはまさしく感動ものです。また、このソフトは業務用ソフトでありながら、教育用のユースを考慮しており、Web で教育関係者の情報交換もできます。

